

# 集義堂しゅうぎどうと必下書院ひつかしょいん

湯浅丈太郎撰 芦城小学校沿革志篇額(小松市立芦城小学校所蔵) 明治16年(1883)に芦城小学校の前身である集義堂創設以来の沿革を記す。

加賀藩では代々の藩主が学問を好み領民はこれに倣った。小松町は絹織物が盛んで人々は学問を大切に思い学ぼうとする気風が高まっていた。医師の梁田養元・小林笠坊等が中心となり志ある者を教えた。寛政六年(一七九四)梁田等は藩の許可を得て、京町に学問所を

創設した。この校舎に西依周行の「集義」の額のあることから集義堂と呼んで親しんだ。当初は金子鶴村かくそんを中心かに運営されていたが後に湯浅木堂・丈太郎父子に引き継がれている。講師は藩校明倫堂から助教が招かれ、経理は町方の支出によったが藩との関係が深かった。学習内容は四書五経・漢方医学・地理などの講義で智識技能を伝受することが主であった。生徒は礼儀正しく、授業は周公しゅうこう・孔子こうしの画像を拝礼して始ま



集義堂に掲げられていた画像(狩野探幽画)(小松市立博物館所蔵) 集義堂に学ぶ子供達は、堂に入ると、まずこの周公(左)・孔子(右)画像に拝礼して、席についた。

り本を読む声が朗々として校舎に満ちていたと伝えるが、明治五年(一八七二)芦城小学校に引き継がれている。幕末の黒船来航は時代を動かし、明



「必下書院」で使われていた教科書「康熙字典」（今江町 願勝寺所蔵）



治維新を実現し教育の大切さを教えた。

今江に教育の実践に取り組んだ人々がいた。

願勝寺住職今川賢栄・医師清水春坡・儒者東方芝山で願勝寺に寺子屋必下書院を開き、昼は子どもに読み書き算盤を、夜は青年に漢学・地理・数学を教えた。残された教科書に、大日本史・資治通鑑・幾何・代数・天文学の書があり特別高度の内容であった。講師は三人の

講師は三人の



覚神の教え子天文学者木村栄  
第1回文化勲章受章



必下書院が育てた逸材今川覚神

外小松・大聖寺から招いたが、公費の援助はなく、三人は私財を投ずるが及ばず書画を画いて謝礼に充てたと伝う。必下の出典は「書経」の「高キニ升ルニ必ズ下キヨリスルガ如ク」と判明し、「まず足下より始めよ」との教えである。多くの塾生の中に今川覚神があり、東本願寺の山命で帝国大学理科大学を卒業第一・第四高等学校教授を経て、後々各地の学校創設に尽力し終生教育に身を捧げた。



必下書院が開かれていた今江町願勝寺

覚神の教え子に木村栄があり、東大天文学科を卒業「乙項の発見」で英国王立天文学賞を受け、昭和十二年（一九三七）第一回文化勲章を受章している。明治五年今江小学校が誕生、必下書院はその任を終えた。（金戸隆幸）